

令和6年3月吉日

七段昇段記

松田 務

はじめに

2024年2月17日、長野県にて七段に昇段することができました。
11回目の受審であり、喜びと安堵、そして剣道を始めてから今に至るまでの長かった道のりの感慨深さを感じています。

苦難と葛藤の連続

合格までの道のりは決して平坦ではありませんでした。審査に落ちるたびに自信を失い、合格への道筋が見えなくなり、七段にふさわしくないという思いに苛まれることもありました。

高額な防具と先生方の厳しい指導

3年前に還暦を迎え、生涯最後の挑戦と思い、高額な防具を新調しました。当時は、すぐに合格できるものと、能天気にも構えていたのです。

しかし、実力に見合わない派手な胴はお世話になっている会の会長先生から封印を命じられ、不合格の連続で自分自身も自信喪失、自慢の胴を着ける度胸も失くしてしまいました。何しろ、ほとんどが、課題でしたから

以下、先生方からご指摘いただいたこと

「構えが悪い」「攻めがない」「左足が撞木足」「指し面になっている」「打ちに冴えがない」「左手が緩んでいる」「物見からみていない」「頭がぶれている」、「足幅が広すぎる」、「左足かかどがついている」、「肩に力が入っている」、「貫禄がない」「打突後の残心がない」など数々の指摘を受けました。ここまで言われたら、もう無理だと思いませんか（笑い）

暗闇の中での支援

しかし、一方で先生方の前向きな支援がありました。

A先生は、

「あなたは面がいいから、自信をもって、力を抜いて、捨てきって打ち切れれば大丈夫！」

B先生は、

「親身に立ち合いの稽古をしていただき、着装、姿勢、攻めの考え方、審査当日の心構えを

丁寧に教えてくださいました。そして大丈夫だよ！」

C先生は、「どんどん良くなっている、出来上がってきている、大丈夫、自信もって！」

D先生は、毎回ワンポイントアドバイスで貴重な意見を頂いてましたが、受審日の週になって、いきなり、左手はこうしたらよいと急なアドバイスがあり、そしてがんばって！と励ましてくださいました。

E先生は、これが最後、1回しか言わないと言って、3つ「正しい構え、攻め（触刃から大事に）冴えのある打ち（さし面はだめ）」があなたの課題だと教えていただきました。

F先生は、大変謙虚な方なのですが、審査稽古を見ていただいたときに、かなりきつく「攻めが全くない」と言われました。

それぞれ前向きに受け止めることができた、私にはとても貴重なご指導でした。

稽古の強化

暗闇ともいえる中、稽古は続けました、いえどちらかという増やしました。

毎週火・木曜の新宿稽古に加え、土曜日は別の道場、日曜日は目黒区剣道連盟や講談社野間道場に通い、週4回の稽古に励みました。長野受審前の週は結果として、6回稽古を行い、とくに、審査当日の朝に稽古してから、受審できたことで、体のキレは他の受審者と比べても大きな差があったと感じています。

合格への確信はなかった

審査では、左足をまっすぐにして顎を引いて、左手を緩めないようにし、必ず攻めを入れて打つことを意識しました。おそらくですが、技の機会は良かったものの、面が先っぽに当たる打突で感触は良くありませんでした。

しかし、残心までしっかり対応できたように思いますし、お相手にはまったく打たれませんでした。

終わりに

お世話になっている会の会長やお仲間の厳しい指導、励ましがなければ、こんなに頑張れなかったと思います。

また、家族には、（特に家内）いつ落ちても何も言わず、普段通り接してくれてとても感謝しています。

これからも、七段にふさわしい剣道を目指し、精進していきます。

今後とも皆様のご指導を賜りたく、心よりお願い申し上げます。

以上